

招へい目的：原虫病研究センター国際シンポジウムにおける特別講演，バベシア病の診断法に関する研究打合せ，獣医学教育における国際協力についての打合せ

外国人研究者名：Gale WAGNER（ゲイル ワーグナー）

国 籍：アメリカ合衆国

所属機関・職名：テキサス A・M 大学獣医学部・教授

外国人招へい申請者：五十嵐郁男（原虫病研究センター）

1. 目 的

原虫の病原性，血清診断や免疫に関与する機能抗原の分子生物学的解析，原虫病を媒介するベクターの疫学の研究に優れた業績を有し，獣医学教育の国際協力においても精力的に活動しているテキサス A・M 大学獣医学部の Wagner 教授を招へいし，原虫病研究センター国際シンポジウムにおける特別講演，バベシア病の診断法に関する研究打合せ，獣医学教育における国際協力について打合せを行うため。

2. 期 間

平成 14 年 6 月 8 日～平成 14 年 6 月 16 日

3. 場 所

帯広畜産大学

4. 内 容

原虫病研究センターは，これまでの原虫病分子免疫研究センターを発展的に解消し，平成 12 年 4 月新たに全国共同利用施設として，ゲノム機能学，耐病性遺伝子工学，病態生理学（客員部門），節足動物衛生工学，高度診断学，先端予防治療学の 6 分野に整備されました。これに伴う研究棟増築工事の完了を記念し，また施設の披露もかねて平成 14 年 6 月 14，15 日に国際シンポジウムを開催いたしました。本シンポジウムは原虫病のみにとらわれず，食の安全に関して，新興感染症の制圧，バイオテロリズム対策等に問題の観点を広げ，「国際化時代における食の安全性の確保—新興・再興感染症，バイオテロリズムに対する対策」と題して行われました。

ワーグナー教授には，「食の安全性とバイオテロリズム」と題して下記のような要旨で特別講演

をして頂きました。「世界がグローバル化されるなかで、各国は新興感染症、食物の安全性、食物の安全保障（安全管理）とバイオテロリズムに対する対策が必要であり、科学が安全な貿易を確保する基盤となる。日本は食物の60%を輸入に依存しており、食用動物とその製品の国際貿易により日本の畜産業や人の健康の健康が新興病原体や海外からの病気に攻撃されやすくなっている。そのため、獣医師は食の安全や安全管理の問題に反応しなければならない最前線にいることになるだろう。帯広畜産大学はこのような世界的な問題を理解し管理できるリーダーを育てることが期待される。そのために、獣医学科はこれらの問題に対応できる新しい獣医師を育成する教育プログラムを作成することが求められる。教育は食の安全や安全管理に至る一番の近道であり、研究によるものではない。しかし、教育は歴史ではなく、研究に基礎を置いたものでなければならない。」

また、ワーグナー教授は獣医学科の齋藤学科長および教授有志と本学とテキサス A・M 大学の獣医学教育の実態、互いの教官・学生の交流の可能性について意見交換を行いました。また、炭疽や BSE の研究状況、設備について視察を行い、更に牧野助教授とバイオテロリズム及び食の安全に関するテキサス A・M 大学のカリキュラムや国際協力について意見交換を行いました。

また、原虫病研究センターの教員と研究内容について懇談および研究施設の視察を行いました。その結果、ウシ、ウマのパベシア病に関する診断法の開発や抗原解析について今後共同研究を進めていくことが同意されました。また、最後に、帯広畜産大学および原虫病研究センターは大変ユニークであり、世界の関心事となっている問題における研究と教育の戦略的な協調と協力を通してこの分野をリードする機会を有しており、今後益々この分野において発展する事を期待するとのコメントが寄せられました。

以上、ワーグナー教授の招へいにより、パベシア病の診断法の開発が促進されたばかりでなく、帯広畜産大学が目標としている食の安全に関する教育・研究、および獣医学の国際標準教育に関して貴重な助言・協力を得ることができました。ここにワーグナー教授の招へいにご支援を頂きました帯広畜産大学後援会に深謝いたしますとともに関係各位に厚く御礼申し上げます。



The International Symposium on
“Food Safety and International Trade”

National Research Center for Protozoan Diseases,
Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine,
June 14 & 15, 2002